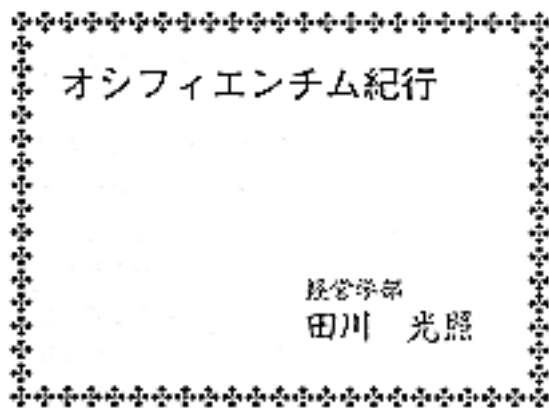


ことは推測できるが、鶏鳴返しのように、相手の言ったことを繰り返すことは難しい。これは母語でも難しいが、決して不可能ではないだろう。鶏鳴返しができるということは、言葉の意味はともかく、聴音での弁別と発音での弁別ができるということだろう。われわれが外国語を学習する場合には、たいてい、まず文字を見て意味を理解することから初め、その後には音を当てはめてゆく。母語としての日本語の場合には、当然、それとは逆のこを生まれてこのかた数えきれないほど繰り返しているはずなのである。完全ではないにしても、聴いたことを音に出しての繰り返しができるようになるかどうか、聞き取りができていくかどうかの境目にあるのではないだろうか。そしてこれが話すことへの捷径でもあることも明らかであろう。（この点は、日本に留学し日本で学位をとったドイツ人の日本研究者も同意してくれた。）

ただ、読んで理解することの重要性がこれによって否定されるわけではない。外国語を学ぶ際には時間的な制約性があるはずだから、今日においても、意味理解を中心とした学習のほうが効率がいいことは確かだろう。問題はそこに、耳から入って口から出る練習方法をうまく加えて行くことではないか。私の場合で言えば、若い時の集中の際、5時間のうち1時間程度を音読に充てておけば、今回のような苦労は軽減されたということだろうか。



ワルシャワから列車で約2時間半南下するとポーランドの古都クラクフに着く。ポーランドは第2次大戦でほとんど全土が破壊されたが、クラクフは幸い戦災を免れ、中央市場広場を中心とした中世以来の瀟洒な町並みを今にとどめている。私たち共同研究グループ4名は1999年8月19日、そのクラクフ発午前8時30分のオシフィエンチム行きバスに乗り込んだ。バスは、路上駐車車の車に妨げられて立ち往生するというハプニングもあったが、途中のバス停で客を乗り降りさせつつ、ほぼ予定時刻の10時にオシフィエンチム博物館前に着いた。オシフィエンチム博物館とはアウシュビッツ強制収容所跡にほかならない。

インフォメーションセンターの前で待ち合わせた博物館でただ一人の日本人ガイド中谷剛さんに案内されて、私たちは収容所正門をくぐった。上にはARBEIT MACHT FREI（働けば自由になる）というプレートがかかげられている。1940年にナチス・ドイツがここに収容所を建設してからほぼ5年間、ポーランド人のほかユダヤ人はじめ



ソ連軍捕虜など全ヨーロッパから送り込まれた囚人たちが、毎日労働に出かけては帰還する際にくぐった門である。

中には30棟におよぶ建物が整然と建ち並んでいる。すべて煉瓦造りの2階建てで、それら建物の一部は、内部を改装して資料展示室として利用されている。偽証明書の数々は、ユダヤ人たちを連行する際、移住に過ぎないと思わせるために発行されたものである。囚人が連行されてくる際に持ってきた名前入りのポストンバック、眼鏡、身障者から奪った義手や義足、布地に織り込むために囚人から刈り取られ、すっかり変色した頭髮など、それぞれ数トンに及ぶ山がガラス越しに展示されている。「死のブロック」と呼ばれる11号棟には立ち牢が当時のまま保存されている。これは、1メートル四方ほどの密閉された小部屋に数人の囚人を立ったまま閉じこめておくためのもので、照明も通風口もない。この「死のブロック」と隣りの10号棟に挟まれた中庭に面する窓はすべて木の板で覆われている。これは、中庭で執行される処刑を窓から見えなくするための目隠しである。銃殺には消音銃が用いられた。

私たちは、バスで10分ほどのプジェジカ（ドイツ名ビルケナウ、第2アウシュビッツ）に向かった。まず正門の階上にある展望室に案内され、収容所全体を見渡した。オシフィエンチムに比べその広大さに圧倒される。なにしろ、総面積約175ヘクタール（約53万坪）の敷地になんと300棟以上のバラックが建ち並んでいたという所である。バラックは煉瓦造りのものと木造のものがあったが、現在では煉瓦造りの45棟と、木造の22棟を除いて崩壊し、崩壊後にも残った煉瓦でできた煙突が林立している。すべてが整然と、静寂の中に眠っている。しかし、ここで百数十万人といわれる人々が命を失っていったのは、紛れもない歴史的事実なのだ。そば降る小雨が、沼地に作られたというこの収容所の特に冬季における厳しさを思わせた。

正門からまっすぐ鉄道の引き込み線が延びている。ここへの囚人の輸送には、当初はオシフィエンチムの貨物駅からトラックが使われていたが、

連行されるユダヤ人の増加にともないそれでは間に合わなくなり、この引き込み線が敷かれたのであった。私たちは正門を背に、2本の引き込み線の間で作られたプラットホームを歩いた。プラットホームと言っても、単なる砂地にすぎない。このプラットホームに降りると、囚人たちはただちに2つのグループに選別された。労働に耐える者とそうでない者のグループである。労働に耐えないと見なされた人々はガス室に直行させられた。

プラットホームのはずれの先には瓦礫の山が残っている。これは、ドイツ軍が撤収する際に破壊したガス室の残骸である。ここに連れてこられた囚人たちは、旅の疲れをとるためにシャワーを浴びなさいという嘘に欺かれて死地に赴いたのであった。

あまりにも重い歴史的事実の証言であるこの収容所跡についての軽々しい感想は差し控えさせていただきたい。それにしても、オシフィエンチム博物館の維持・運営の資金にドイツ政府およびドイツ企業から多額の援助金が提供されており、このことを知っている一般のポーランド人のドイツに対する信頼が回復されているという中谷さんの話を聞くにつけ、思い出されるのが日本の戦後処理のまずさである。たとえば、残酷な人体実験を行い多数の人命を奪ったことで知られる731部隊ひとつとってみても、日本政府は謝罪どころかなんら明確な態度表明をしていないのである。

私たちはいくつかのバラックを覗いた後、オシフィエンチムに戻り、午後1時20分発のクラクフ行きバスで収容所跡をあとにした。

